ISSN 0289-4130

研究紀要

第15号

1999

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

研　究　紀　要

第 15 号

1 9 9 9

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目　　次

［論文］

東釧路式系土器へのモノローグ……谷井　彪（ 1）

埼玉県における低地の周溝墓と建物跡 (2) ……福田　聖（ 35）
— 周溝墓とは何かを探るための試み —

弥生・古墳時代と神仙（道教）思想……中村　倉司（ 73）

北陸系装飾器台の系譜についての小論……利根川章彦（101）
— いわゆる「特殊な器台」について —

武蔵寺谷廃寺の研究……昼間　孝志（117）
木戸　春夫
赤熊　浩一

北陸系装飾器台の系譜についての小論

－いわゆる「特殊な器台」について－

利根川　章　彦

要約　平成10年度における本庄市西富田・四方田条里遺跡の整理作業の過程において、第２号住居跡から、鍔状突帯をもつ特殊な形態の器台形土器が出土していたのに気付いた。このような形態の土器は、古墳時代前期初頭前後においてときおり出土する北陸系の装飾器台形土器を祖形とする土器と考えることができる。埼玉県においてはこの種の土器については従来あまり取り上げられたことはなかったので、本稿において県内の出土例を集成し、その変遷や終焉について若干の考察を試みた。その結果、A（装飾器台系）・B（結合器台形土器系）・C（鍔付高坏系）・D（その他）の４つの群に分類して考察した。時間軸上では、A群→B群→C群という順序に変遷していく傾向があることがわかり、A群の出現は五領期（古）段階でさらに遡る可能性もあり、C群は和泉期段階まで継続する。また、従来この器種については器台に壺や鉢が結合した土器という見方が定着していたが、本稿の作業を通じて、別系統と考えられる少数例を除けば、北陸系土器として積極的に評価できるのである。

1　はじめに

古墳時代初頭前後の頃の日本列島において各地域の土器が活発に交流する現象が検討されるようになってからすでに20年に近い歳月が経過した。1970～80年代が土器編年細分論を中心に議論が進んだのに対し、90年代末葉の現在はむしろこれらの細分論の検証と各地域の編年の整合性確認を中心としており、その手段の一つとして、この土器交流現象を取り扱う傾向すらある。

昨年群馬県群馬町の「かみつけの里博物館」で開催された特別展「人が動く・土器も動く―古墳が成立する頃の土器の交流－」もこの問題に焦点をあてて古墳時代初頭の群馬県地域の人々の経済的・文化的活動の一側面について明らかにしようという企てであった。この展示においては近畿・東海・北陸などの各地域から①それぞれの地域特有の土器のそのものが入ってきた場合（展示パネル・展示図録の表現においては「レベル０」）、②それぞれの地域の土器をまねて群馬で作った場合（同じく「レベル１」）、③群馬でまねた土器をさらに下った時期にまた群馬の人々がまねて作った場合（同じく「レベル２」）、という３通りの土器がどのような様相をもっているかという興味深い比較展示が行われており、東海系のＳ字状口縁台付甕・パレススタイル壺・「東海系加飾壺」・伊勢型二重口縁壺・有段高坏、北陸北東部系の「千種甕（くの字状口縁甕）」、北陸南西部系の有段口縁甕などの群馬県域への流入を解説していた。古墳時代初頭の外来系土器研究に対してたいへん示唆的であり、今後の古式土師器研究には欠かせない分析視角を具体的に提供したものと評価できる（若狭・田口他　1998）。

ところで、平成10年度に筆者が整理・報告書作成事業に従事した本庄市西富田・四方田条里遺跡の平成８年度調査区第２号住居跡の床面付近から、口縁部・脚部とも破損している器台形土器が１

点出土していたことが判明した。この土器は、器受部は鍔状突帯となり、やや長めに立ち上がる口縁部の側面に一対ないし4単位、器受部底面に1個、脚裾部に4方向、丸い小孔が穿孔されるものである。器表面に彩色はされていなかったが、赤色塗彩されているのと同様な効果があるように、オレンジ色に発色するように焼成されていた。かつて、熊野正也氏が「特殊な器台」として紹介・検討された器台・高坏の一群に相当するものとして理解できるものであり(熊野　1974・1977・1980)、型式学的祖形は石川県域を中心とした北陸南西部の弥生時代後期から古墳時代初頭に流行するいわゆる「装飾器台形土器」にあるものと思われる。西富田・四方田条里遺跡自体には、調査報告書に記したように、畿内系の二重口縁壺や小型器台、東海系のS字状口縁台付甕の破片も出土している。わずか1点とはいえ北陸系の土器が本庄市域の遺跡から出土したことは、今後埼玉県北部の古墳時代初頭の外来系土器をめぐる議論に少なからず影響するものと確信している。

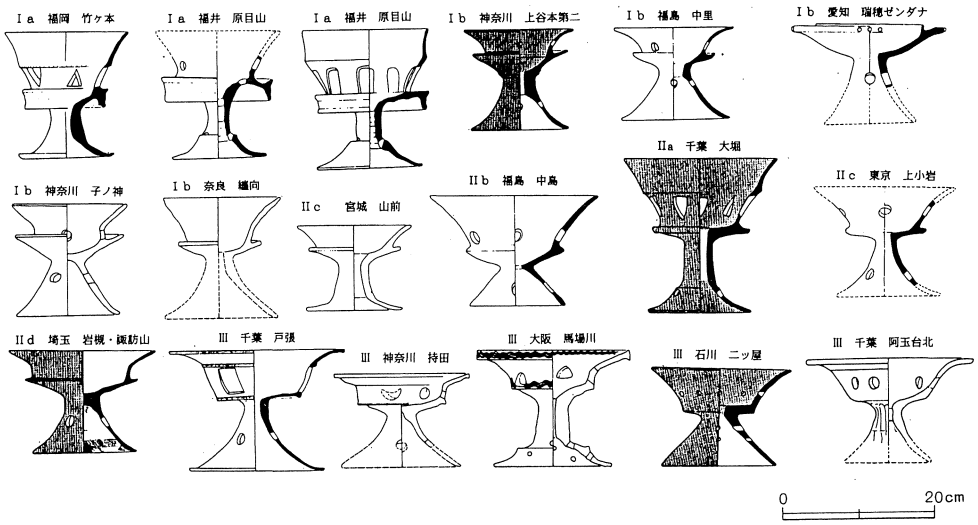
そこで、小稿では、この「特殊な器台」を題材に北陸系土器と埼玉県域の古墳時代初頭の遺跡・遺物の関係について考えられることを若干まとめ、調査報告書の考察を補完する形で述べてみたい。しかしながら、今回は埼玉県出土の「特殊な器台」の集成作業を中心に述べるため、北陸系土器の関東地域での受容の問題の核心に迫ることはできない。あらかじめおことわりしておく。

2　「特殊な器台」の分類をめぐって

「特殊な器台」については、1960年代以降の古式土師器研究においてかなり取り上げられてきているが、すでに鈴木直人氏による詳細な研究史の整理（鈴木　1994）がなされているので、小稿では研究史については特に記述しない。ただし、行論の都合上、分類概念についてだけ取り上げておくことにする（第1図)。

それまであまりはっきりした分類が提示されてこなかったこの種の土器について明確な分類を示したのは熊野正也氏であった（熊野　1974・1977・1980)。熊野氏は3回の資料集成を通じて大別3類、細別8類の分類を示した。Ⅰ類は壺口縁部・坩・鉢を器台上に乗せて結合させた、複数の土器を合わせた器形をなすもので、a類（器台部の口縁が帯状)、b類（器台部の口縁が素縁)、c類（器台部の口縁断面がコの字状）の3類に細別される。Ⅱ類は高坏形を呈し、坏底部に鍔状突起をもつもので、a類（高坏形で器受部下端に三角形透かしをもつもの。千葉県・大堀型)、b類(高坏形で器受部下端に円孔をもつもの。福島県・中島型)、c類(高坏形で坏部中央に円孔をもつもの。東京都・上小岩型)、d類（高坏形で坏部は大きく外反し、坏部には無穿孔。埼玉県・諏訪山型）の4類に細別される。Ⅲ類は高坏形で脚部が小さく、坏底部に鍔状突起をもたないものとし、細別はされず、今後の類例の増加を待って考えたいことを述べた。なお、第1図上段に熊野氏の分類に沿った分類一覧図を示したが、この図は利根川が熊野論文を読みながら作図し、西富田・四方田条里遺跡の調査報告書の結語のページに掲載したものである（利根川　1999)。

その後、鈴木直人氏が熊野氏の業績を踏まえて、研究史整理と新たな分類を提示している（鈴木1994)。鈴木氏は熊野分類を評価しつつも、「特殊な器台」が器台と高坏の双方の器種を包含していることを指摘し、「結合器台形土器」と「有孔高坏形土器」の二者に分けた。「結合器台形土器」には、器台の形状を示すⅠ類、器台の形状を示さないⅡ類があり、土器の下部の形態からⅠ類にはA



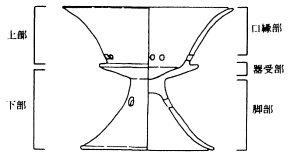
熊野正也氏の「特殊な器台」に関する分類（熊野　1974・1977・1980を参考に利根川作図）

			下部		上部
結合器台形土器	Ⅰ	A	垂下帯を持つ器台		壺の口縁部
		B	小型器台	a	壺の口縁部
				b	坩・椀等
	Ⅱ	A	脚部は小型器台だが器受部平坦	a	壺の口縁部
				b	坩・椀等
		B	脚部柱状		壺の口縁部
		C	脚部下膨らみ		壺の口縁部

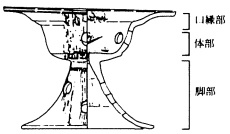
第1表　結合器台形土器の分類

有孔高杯形土器	Ⅰ	杯下部に稜をもち外反
	Ⅱ	体部をもち外反

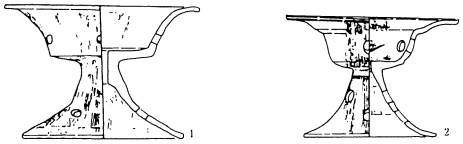
第2表　有孔高杯形土器の分類



第1図　結合器台形土器の部位

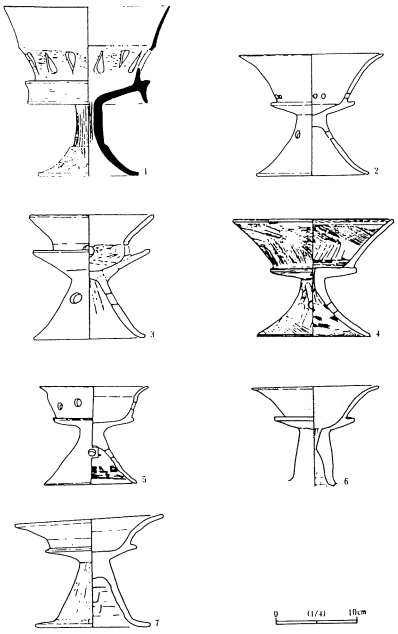


第2図　有孔高杯形土器の部位



1．Ⅰ類　千葉県平賀遺跡
2．Ⅱ類　神奈川県なすな原遺跡

第3図　有孔高杯形土器の分類



第4図　結合器台形土器の分類

1．ⅠA類　石川県南新保D遺跡
2．ⅠBa類　千葉県公津原遺跡
3．ⅠBb類　神奈川県上谷本第二遺跡
4．ⅡAa類　茨城県木滝台遺跡
5．ⅡAb類　千葉県高野台遺跡隣接地
6．ⅡB類　千葉県村田服部遺跡
7．ⅡC類　千葉県花輪遺跡

鈴木直人氏の「有孔高坏形土器」・「結合器台形土器」に関する分類

第1図　熊野氏・鈴木氏による「特殊な器台」の分類

類（脚部が有段で器受部に垂下帯をもつ）、B類（いわゆる小型器台）、II類にはA類（脚部は小型器台に似るが器受部が水平もしくはそれに近い）、B類（脚部柱状で、器受部は小型器台状・水平もしくはそれに近いもの）、C類（脚部は中ぶくらみの柱状部に大きく開く裾部・直線的な「八」の字状脚部に短い裾部がつくもの。器受部は水平もしくはそれに近い）の5つの細別が示された。上部の形態に関しては壺口縁部がa類、坩・椀等をb類とするが、I－B類とII－A類にのみこの両者が見られるという。「有孔高坏形土器」は、坏部下位に稜をもち、口縁部が大きく外反し、坏部に透孔、底部に貫通孔をもつものをI類、坏部が直立気味に立って体部をなし、そこから口縁部が大きく外反する、坏部に透孔、底部に貫通孔をもつものをII類とする。坏部透孔と底部貫通孔は、どちらかが欠ける場合もある。

鈴木氏の分類は形態的に高坏と器台に分けた上で、器台部分と上部の器形のそれぞれに対して分類を行い、総括したもので、熊野氏分類よりも分類基準が明解である。熊野氏分類は便宜上器台と高坏の区別を行うのであるが、鈴木氏分類よりはあいまいな部分もある。

器台と高坏が機能的には互換性・連続性があり、前者から後者への発展を考慮することができる以上、鈴木氏のように現代人の学問的感覚で器台と高坏を機械的に区分することによって、この器種の意義についての考察がより建設的な方向に進んでいくのかいささか疑問である。

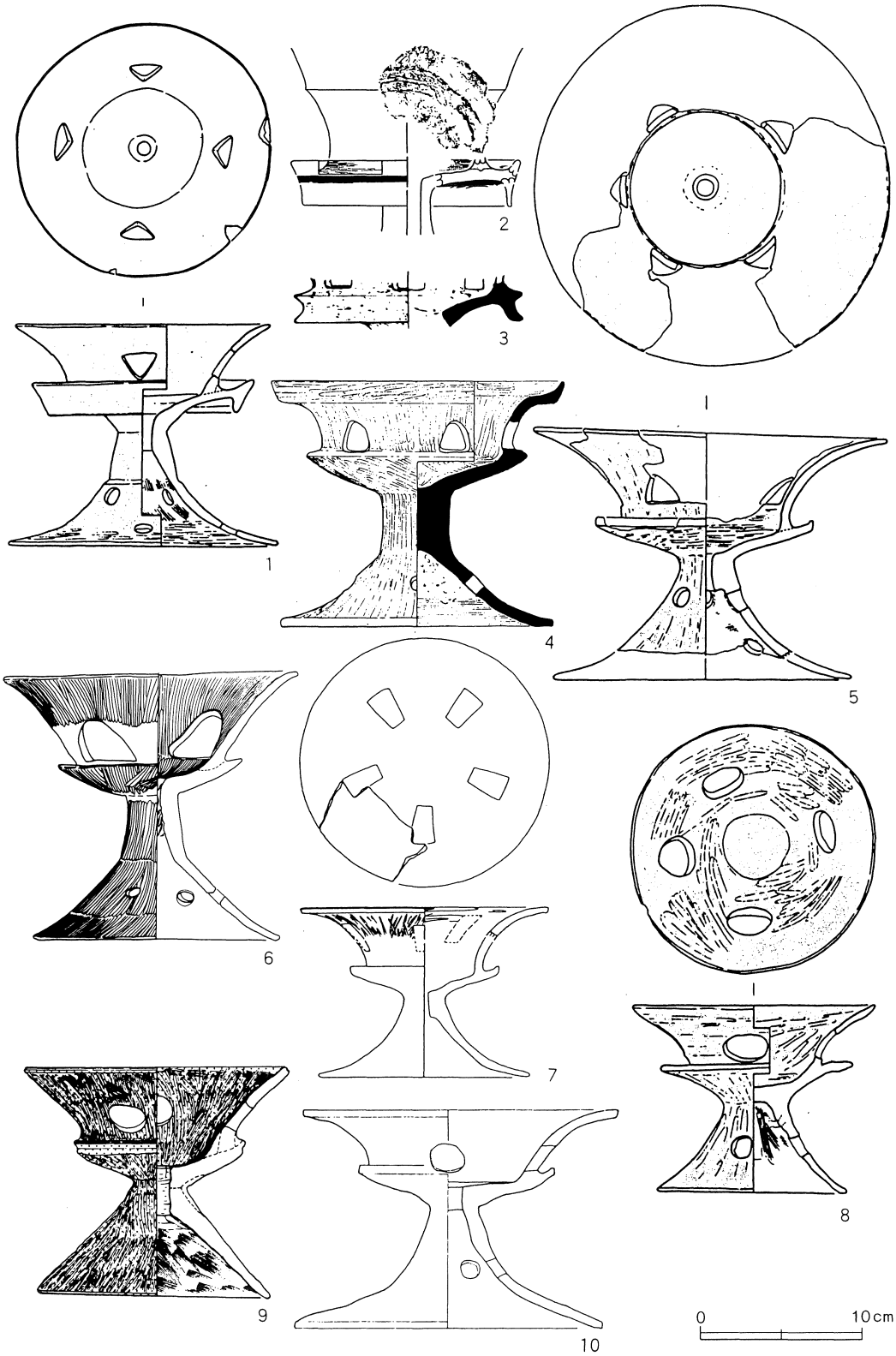
小稿では、これらの分類を参考にはするが、まったく違う視点で器種の連続性を追求する立場から取り扱っておきたい。

3　埼玉県における「特殊な器台」

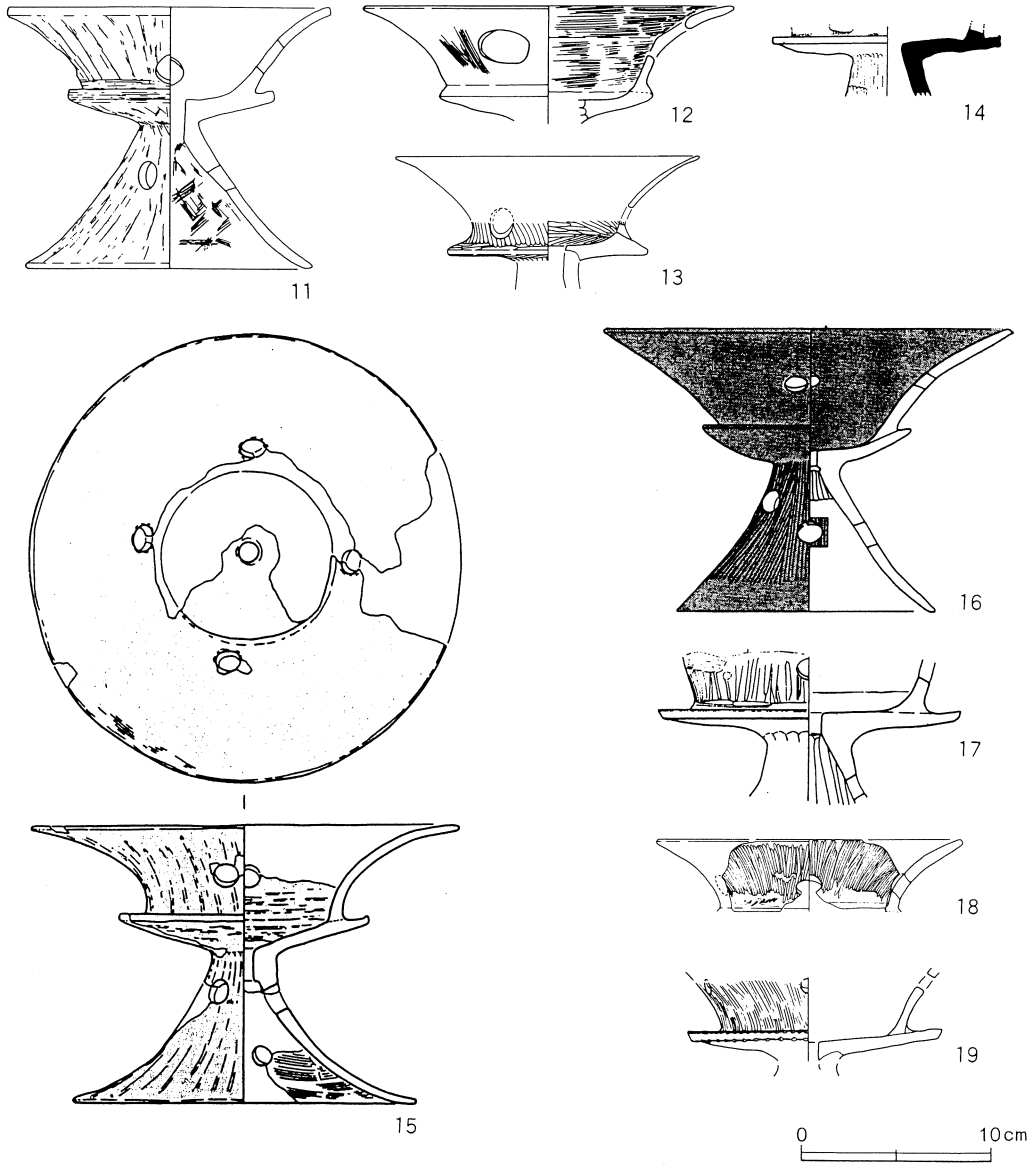
この章では、実際に出土が確認された埼玉県の「特殊な器台」について概要を説明しておく。

叙述の都合上簡単な分類をしたが、細別は行わず、将来もう少し詳しく述べる機会に網羅的な考察を果たすつもりである。分類は大きく4つに大別した。便宜上、これらにA・B・C・Dの名称を与え、「群」として取り扱う。本来的には「類」とすべきところであるが、すでに西富田・四方田条里遺跡の調査報告書でも述べたが、まったく違う出自の土器が数多く含まれている可能性があり、それらを一括してしまうのは将来の研究の障害になりかねないため、少々乱暴ではあるが、それらをあらかじめ腑分けしてしまうつもりで、「群」と呼称するものである。

まず、A群である（第2図1～第3図14）。「特殊な器台」のほとんどのものが北陸系の装飾器台形土器に出自をもつことは多くの研究者が認めるところであり、実際にかなりの数のものが装飾器台に類似する特徴を多くもつ。A群には、北陸系装飾器台形土器の特徴を多く備えるものを取り上げた。坂戸市中耕遺跡第21・32・42号周溝墓（杉崎他　1993）、大宮市原遺跡（水判土原地区）第3号住居跡（諸墨他　1985）、川越市霞ヶ関遺跡2－G4－1住居跡（塩野他　1981）、桶川市西台遺跡第3号住居跡（塩野他　1970）、上尾市稲荷台遺跡B区第55号住居跡（書上　1994）、坂戸市稲荷前遺跡C区第1号周溝墓（富田他　1994）、東松山市下道添遺跡第13号周溝墓（坂野　1987）、東松山市上野本表採一括遺物（村田他　1982）、児玉郡美里町日の森遺跡第1号溝跡（菅谷他　1978）、行田市小敷田遺跡5区河川跡（吉田他　1991）、児玉郡児玉町浅見境北遺跡第20号住居跡（恋河内他1997）、岩槻市諏訪山遺跡第7号住居跡（増田・高山他　1971）、上尾市雲雀出土品（本稿第8図1

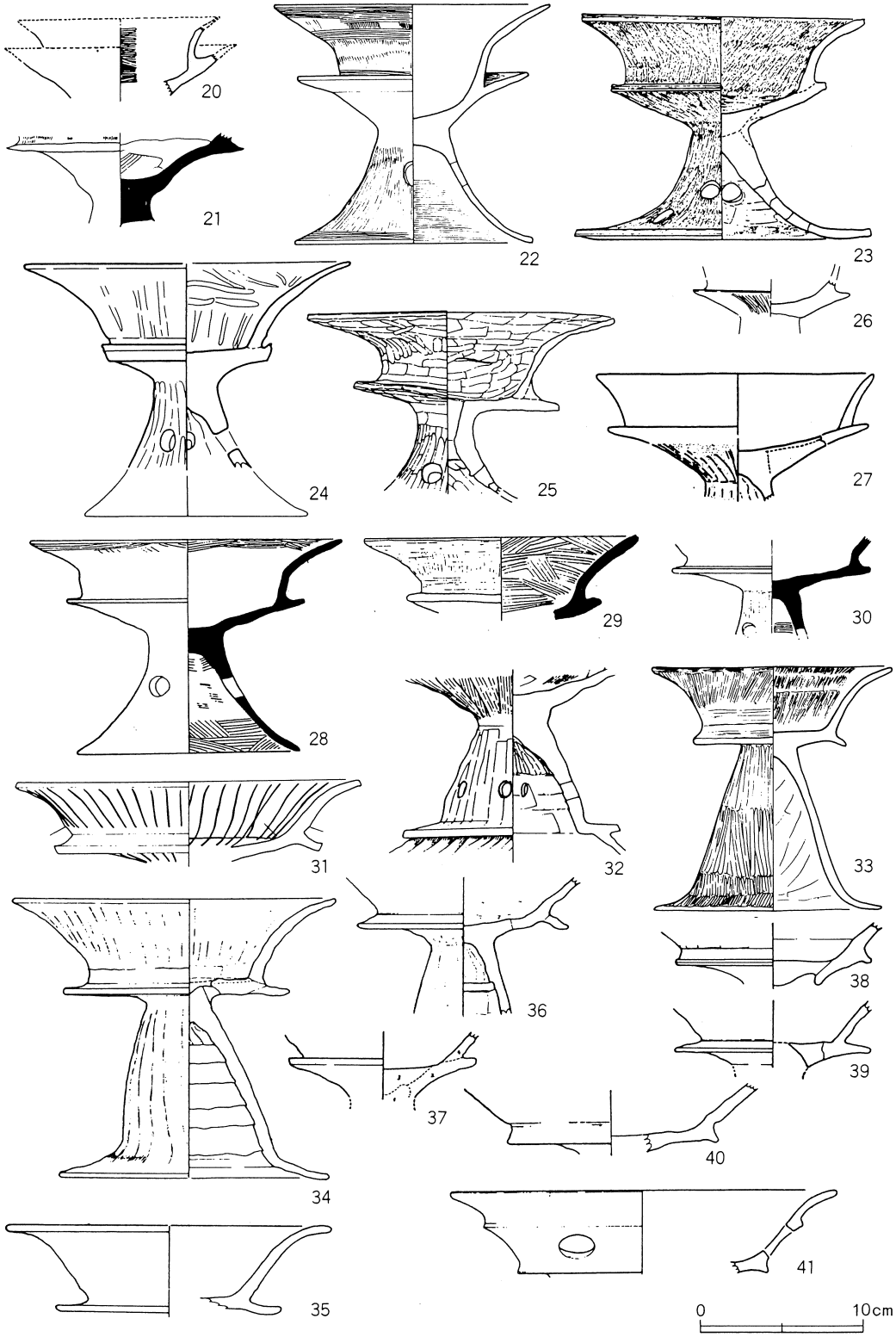


第２図　埼玉県出土の「特殊な器台」(1)　Ａ群（装飾器台系）

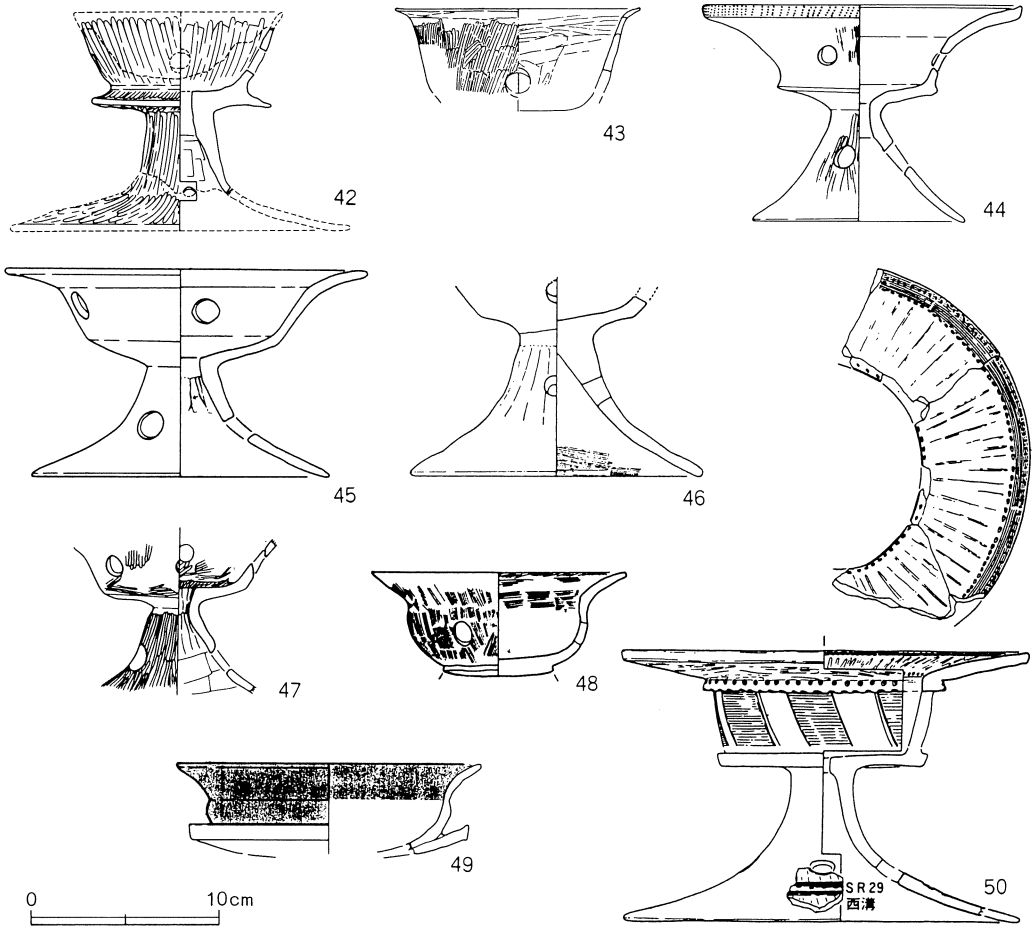


第３図　埼玉県出土の「特殊な器台」(2)　Ａ群・Ｂ群（結合器台形土器系）

～３）の各遺跡・各遺構からの16点がこれに該当する。口縁部は大きく外反し、口縁部の下部近くにやや大きめの透孔が開けられる。概ね４単位、まれに５単位で穿孔されることが多い。孔の形態は円形・楕円形が多いが、三角形（第２図４・５、第８図１）・逆三角形（第２図１）・長方形（第２図７）の孔もある。器受部の端部は帯状になるもの（第２図１・２・３）、長く突出するもの（第２図５・６・７・８・10、第３図11・13・14）、突出度の低いもの（第２図４・９、第３図12）がある。脚部には装飾器台形土器特有の段があるものが何点か見受けられるが（第２図１・４・６）、小型器台や東海系の高坏の脚部を模倣して、「ハ」の字状に立ち上がるもの（第２図８・９、第３図11）や、



第４図　埼玉県出土の「特殊な器台」(3)　Ｃ群（鍔付高杯系）



第５図　埼玉県出土の「特殊な器台」(4)　Ｄ群（その他）

大きく開いて裾広がりの形態になるもの（第２図５・10、第８図２）がある。口唇部は、尖り気味に作り出すもの（第２図１・５・６・８、第３図12)、外側に面をもつもの（第２図７・10、第３図11)、沈線をもつもの（第２図９）、上方につまみ上げるもの（第２図４、第８図１・３）がある。

また、本来この群に加えて理解すべきかもしれないものに比企郡嵐山町行司免遺跡第 281号住居跡（植木弘・植木智子　1988）の、坏部に楕円形のやや大きな孔が３単位に開けられた高坏（第４図41）があるが、これ以外のものがすべて五領期段階のものであるのに対して、この土器だけ和泉期段階で５世紀中葉前後の時期に下ったものであるため、A′群としておき、純粋な意味のＡ群からは除いて考えておきたい。

次に、Ｂ群としたもの（第３図15～19）は、結合器台形土器として考えてよいと思われるもので、坂戸市中耕遺跡第42号周溝墓、坂戸市広面遺跡 SZ18（村田　1990)、北本市石戸城跡第１号住居跡（吉川・下村　1990)、上尾市稲荷台遺跡Ａ区第28号住居跡、戸田市鍛冶谷・新田口遺跡Ａ区２号包含層（西口他　1986）から５点の出土が確認できた。Ｂ群の土器はＡ群に比較的近い特徴をもつ

が、口縁部の穿孔の位置が口縁部中央まで上がっており、小さめの円孔として形式化している。これは小型器台の一般化に伴い、影響を受けたためと考えられる。器受部端部は長く突出するものが多いが、A群の状況を考えるならば、今後類例が増えてくれば必ずしも長く突出するものばかりにはならないであろう。脚部は「ハ」の字に開いて立つもの（第3図16）と、やや大きく開くもの（第3図15）がある。B群も五領期段階に限られそうであるが、あまり古い段階に属する例はないようである。

第3に、C群であるが、この一群は口縁部（坏部）側面に穿孔をしないものを取り上げた。口縁部（坏部）と器受部との接合部にも穿孔されないものが多く、鍔付高坏の形態になったものがほとんどである。児玉郡神川町前組羽根倉遺跡第5号周溝墓（書上・柿沼・駒宮・坂本・関・利根川　1986）、比企郡滑川町大谷遺跡第5号住居跡（金井塚　1973）、富士見市南通遺跡第3地点31号住居跡（小出1983）、東松山市下道添遺跡第11号住居跡、児玉郡美里町羽黒山古墳群第9号住居跡（長滝　1991）、大里郡江南町姥ヶ沢遺跡第19号住居跡・同町富士山遺跡16号住居跡（森田他　1998）、戸田市鍛冶谷・新田口遺跡B区第79号井戸、坂戸市中耕遺跡表採、岩槻市諏訪山遺跡第5・7・34号住居跡、本庄市後張遺跡第152号住居跡（増田・立石他　1982）、児玉郡美里町如来堂C遺跡第2号住居跡（増田他　1980）、児玉郡上里町愛宕遺跡第1・3・7・10号住居跡・表採（駒宮他　1976）から合計22点が出土している。口縁部（坏部）形態はかなりバリエーションが多く、器受部の傾斜が大きく鍔状突帯の突出度が大きいもの（第4図20・22）、器受部は傾斜するが、鍔状突帯の突出度がそれほど大きくないもの（第4図23・26～29・32）、器受部が水平に近く鍔状突帯の突出度も大きくないもの（第4図24・25・30）、高坏形態に変化しており、鍔状突帯は水平あるいはやや下向きに突出するもの（第4図31・33～40）がある。脚部は「ハ」の字に立つもの（第4図24・28）、大きく裾広がりになるもの（第4図22・23）、脚部中位から下位がふくらみをもつ通常の高坏と同様の形態になるもの（第4図33・34）、脚裾部に突帯をもつもの（第4図32）がある。また、脚部の透孔は第4図22～25・28・30・32に認められたが、このうち32だけは共伴の土器から和泉期段階と考えられるものである。概ね五領期段階に脚部透孔があり、和泉期に入ると一部の例外を除いて透孔を失う傾向がある。器受部水平化も五領期最新段階から和泉期段階に顕著になると考えられよう。

最後にD群に触れる。この群はA～C群の範疇に含まれないものをすべて取り上げたため、個性的な土器が多い。この群には9点が属する。第5図42は本庄市西富田・四方田条里遺跡第2号住居跡（利根川　1999）の土器であるが、43の大宮市鎌倉公園遺跡第32号住居跡（諸墨他　1984）と同様に口縁部が直立に近い角度で立ち上がるもので口縁部中位に透孔がある。鍔状突帯はやや下向きに突出し、脚部は大きく裾広がりとなる。この2遺跡以外には、行田市小敷田遺跡5区河川跡（44・47）、戸田市鍛冶谷・新田口遺跡第27号周溝墓（45）、同A区2号包含層（49）、児玉郡児玉町雷電下遺跡表採（46）（駒宮他　1979）、浦和市別所遺跡第6号住居跡（48）（青木・小倉他　1980）、坂戸市中耕遺跡第35号住居跡（50）からの出土である。第5図44～47は鍔状突帯をもたない高坏状の器形を呈するもので、鈴木氏の言う「有孔高坏形土器」である。口縁部（坏部）中位には円孔が3～4単位で穿孔される。44は脚部が「ハ」の字に開いて立ち、45～47は脚裾部がやや大きく広がる。48・49は坩の形態の土器を器台に接合した結合器台形土器である。口縁部（体部）の側面には、48は円

孔があるが、49は穿孔されない。50は体部が直立し、口縁部は外に屈曲して大きく広がる。体部側面には平行四辺形の透孔が連続的に６～７単位分開くものであるが、類例が少ないものである。脚裾部はほとんど存在しないが、口縁部と同一個体と考えられる脚裾部の小破片からは大きく裾広がりになる脚部を想定している。

以上取り上げたのが、管見の及んだ限りの埼玉県出土の「特殊な器台」のすべてである。総数52点である（第２～５図に図示したもの50点、第８図に示した上尾市雲雀出土品２点）。

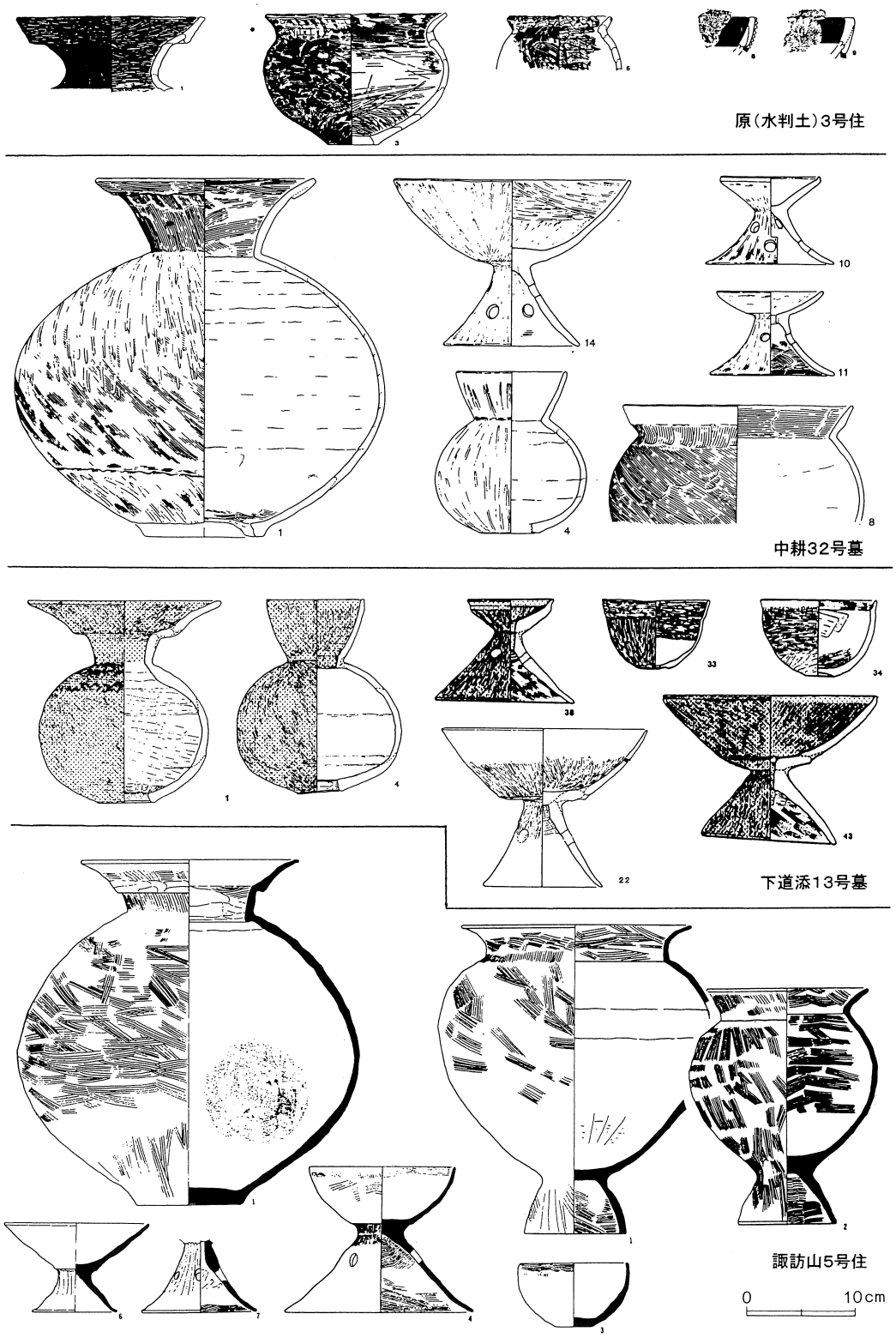
４　「特殊な器台」の変遷と終焉について

前章において埼玉県出土の「特殊な器台」を網羅したが、これらは時間的推移にしたがってどのように変化し、消滅していくのかを、本章において、共伴する土器群を参考に考えてみたい。

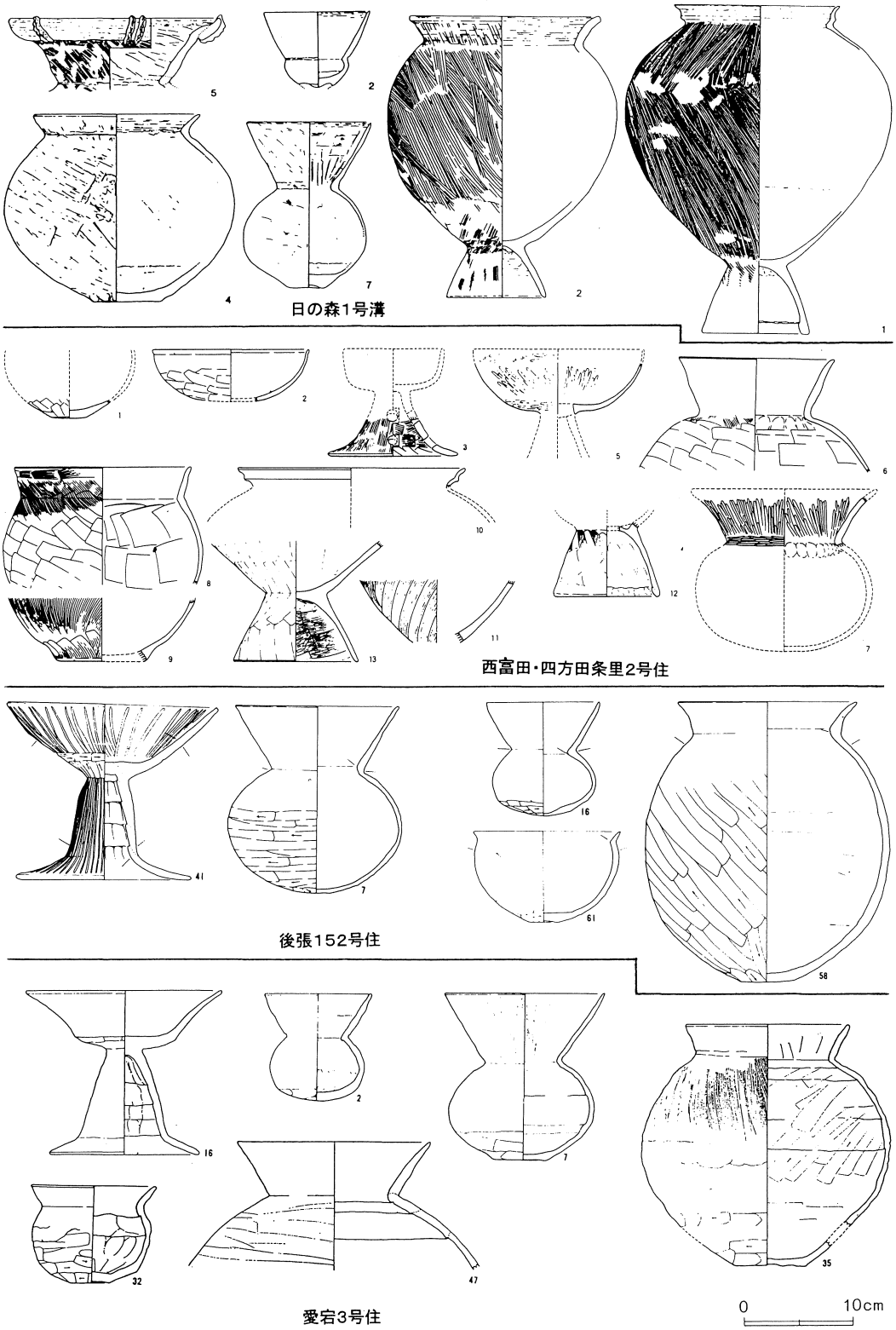
「特殊な器台」に共伴する土器群が分析に耐えうるものである遺構はあまり多くない。その中で比較的良好なセットになっているものを第６・７図に図示した。原遺跡第３号住居跡・中耕遺跡第32号周溝墓は、Ａ群中でも最も北陸系装飾器台に近い個体を出土した遺構であるが、その共伴土器はやや幅がありそうである。原遺跡３号住は外来系土器を含まず、台付甕の口縁部形態も「く」の字屈曲が完成する前の湾曲形態であり、やや古い段階からある棒状浮文を口縁部にもつ複合口縁壺もある。それに対して、中耕遺跡32号墓は、東海系の大型高坏をもち、Ｘ字形に近い小型器台もある。台付甕は口縁部が「く」の字形になっている。Ａ群の古い段階は五領期（古）段階と考えることができるが、土器様相からは古墳時代直前の時期を含む可能性もある。やはりＡ群を伴う下道添遺跡13号墓も中耕遺跡32号墓とほぼ同じ時期として考えられるが、坩のしっかりしたものがなく、小さな平底の鉢が代用されている。同じくＡ群で県北部の日の森遺跡１号溝は坩が出現しており、Ｓ字甕も肩横線がなくあまり古いものではない。Ａ群の時間幅の中に五領期（古）から（中）あるいは（新）段階くらいまで含まれそうである。Ａ群のやや新しいものとＢ群が共伴する中耕遺跡42号墓では、やや形式化した小型器台・東海系大型高坏があるが、二重口縁壺のしっかりした形態のものが伴う。下道添遺跡13号墓とほぼ同じかやや古そうである。また、広面遺跡 SZ18 はやや矮小化した小型器台を含み、石戸城跡の器台・高坏・坩等もやや変形しており、新しい段階と考えられる。Ｂ群は、Ａ群と一部併行しつつもやや新しい段階を主としている。Ｃ群の古い段階を代表すると思われる諏訪山５号住には器台が減少して目立たなくなり、二重口縁壺も内面に明瞭な段がないものになっている。台付甕のハケ目もややいい加減に施されるようになる。五領期（新）段階に下っているであろう。また、愛宕遺跡の一群や後張 152号住は台付甕がきわめて少なくなっているか消滅しており、高坏もやや下膨らみに形式化している。和泉期段階に下っているのは間違いない。

Ａ・Ｂ・Ｃ群に関しては時間的な重複関係がかなりありはするものの、概ねＡ→Ｂ→Ｃという推移をたどる可能性が高いと考えられる。

ところで、Ｄ群に分類したものには、Ｂ群に近い様相をもつ西富田・四方田条里遺跡２号住もあるが、丸底椀や平底甕を伴うこと、坩が大型化していることなど和泉期に近い特徴も目立つ。一方、鍛冶谷・新田口遺跡27号墓にも椀が伴うが台付甕が主体で五領期（新）段階であろう。小敷田遺跡５区河川跡もやや幅があるものの土器の大半は五領期（新）段階と考えられるものである。



第6図 「特殊な器台」共伴土器の推移(1)（埼玉県中・南部）



第７図 「特殊な器台」共伴土器の推移(2)（埼玉県北部）

したがって、D群はA群のやや新しい段階に併行して出現し、和泉期段階には下らないという位置付けを与えうるであろう。

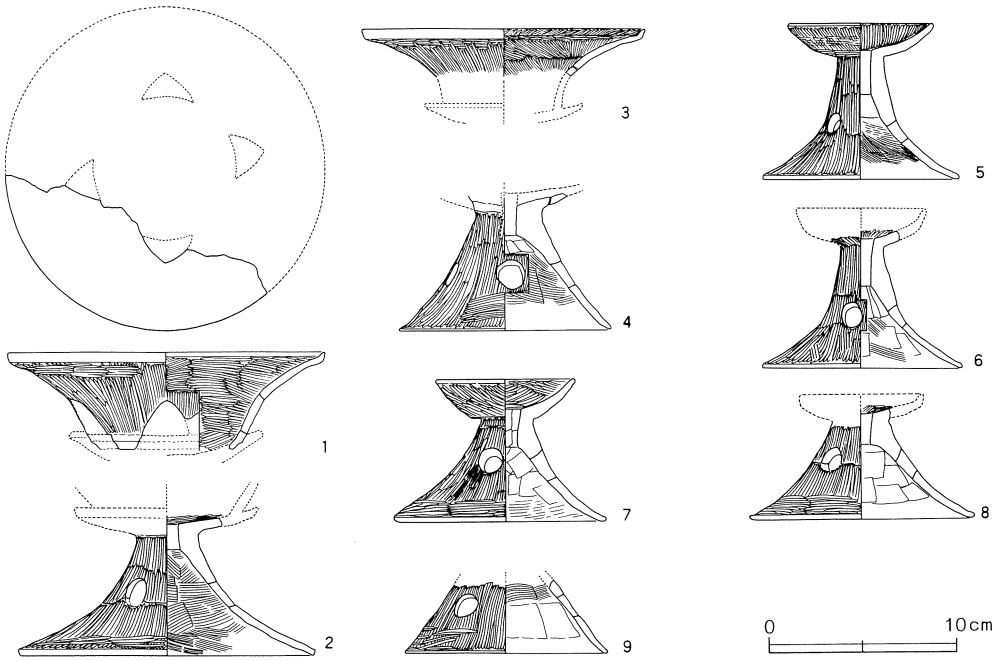
5　上尾市雲雀出土の「特殊な器台」について

ここで取り上げる土器群は、玉口時雄氏が福島県いわき市平原高野遺跡の調査報告を通じて古式土師器の特徴に言及した論文である「古式土師器小考」（玉口　1973）の中で、古式土師器を特徴づける器種の一つとして「高坏状器台」と呼称した上で「特殊な器台」の集成をされた中に紹介された「上尾市雲雀遺跡」出土の「特殊な器台」2点と共伴する土器群である。「上尾市雲雀遺跡」の「特殊な器台」は玉口論文にしか取り上げられたことがなく、今回の論文の主目的である埼玉県内出土の「特殊な器台」の資料集成のために玉口氏にご教示を賜ろうとしたが、玉口氏からは土器の実物の提供を受けることとなり、資料所有者である土肥孝氏からこの土器群に関するご教示を賜った上で紹介しようとするものである。

ここで紹介する土器は、昭和40年3月頃のとある日、上尾市畔吉地区で遺物の表面採集をしていた当時高校生の土肥氏が、約 150㎡程度の面積をブルドーザーが造成作業しているところに遭遇し、その造成地内から採集したものであるという。土肥氏の記憶しているところでは、重機の造成工事は止めることができなかったので、重機の往復する間の短時間で掘り出すことができた限りでの一括資料である。この造成地には、土器群がまとまって出土した径2m程度の小竪穴が1基あるだけで、他に住居跡等の遺構らしきものは見当らなかった。小さな竪穴である割りには土器はやや多くまとまって出土した。土器の総数は30点を超えており、S字状口縁台付甕・単純口縁壺・坩・小型器台等とともに「特殊な器台」がある。出土状態では、小型器台数点が「特殊な器台」をとりまくように配置されて置かれていたようだった。S字状口縁台付甕も逆位で置かれたように出土したものがあるらしい。遺物の大半は覆土からの出土で床面出土のものは器台類を除くとごくわずかであったという。土肥氏はこの点から小竪穴を祭祀的機能の遺構ではないかと想定しているという。

土肥氏から玉口氏に手渡されて「古式土師器小考」に掲載されたのは、このうちの「特殊な器台」2点のみであったが、玉口論文中には他に小型器台があることはすでに記述されていた。今回玉口氏からお送りいただいた土器は、「特殊な器台」の口縁部破片2点分、「特殊な器台」の脚部破片1点分、小型器台の破片6点分であるが、玉口論文に示された実測図とは必ずしも同じ状態ではなく、玉口家の移転その他の関係でやや破損していたため、本来あった破片の部位で失われているものもあるかもしれない。

「特殊な器台」の口縁部は、口径17cmのと15cmのものがあり（1・3）、大型の1は2の脚部破片と同一個体であると考えられるが、接合面がないため、別個体の可能性も考慮しなければならない。1と2が同じ土器であれば器高約12cmとなる。口縁部の穿孔は4単位ないし5単位であり、やや大きめの三角形である。4単位で図示した。2の脚部中位の穿孔は3単位でやや大きめである。3は上部しかなく残存率も悪いので、大きさは参考程度となろう。口縁部下部に穿孔されていたかどうかはこの破片からは不明である。1・3は外反度が大きく、口唇部が上方につまみ上げられるのが大きな特徴となる。1～3は赤彩されていたようである。器面はよく磨かれており、縦横に交差す



第８図　上尾市雲雀出土の「特殊な器台」・小型器台

るように磨かれている部分もある。２の脚部内面にはハケ目調整痕がよく残る。４以降は小型器台であるが、４だけは「特殊な器台」の可能性もある。脚部の穿孔は４のみ４単位で、５～９は３単位である。器受部内外面と脚部外面はよく磨かれている。脚部内面はハケ目調整後、丁寧にヘラナデされたようで、ハケ目の残るものとヘラナデのみ見えるものがある。脚裾部外面に横方向のミガキが入るのが特徴的である。器受部の形態はなだらかに開く５と、屈曲部のある７がある。脚部は５・６が長く、７・８が短い。「特殊な器台」はＡ群に属するものである。器台の形態や、土肥氏にご教示いただいた共伴のＳ字甕のハケ目が粗くなっていることなどから、五領期でもやや新しい段階と考えた方がよいであろう。

6　おわりに

以上、「特殊な器台」について若干の考察を試みたが、問題の本質には未だ到達することはできなかった。ゆえに、この問題に関してはいずれ再論するつもりである。

最後に、小稿を通じて明らかにしたこの種の土器の様相に関するささやかな考察を整理したい。

第１に、埼玉県内では「特殊な器台」は50点を超える個体の出土があきらかになった。

第２に、これらは大雑把に４つの群に分けて考えることができる。Ａ群は、口縁部下端に三角形・長方形・円形などの大きめの穿孔が行われ、器受部端部はやや突出度が高く、脚部に段をもつものもあるなど北陸系の装飾器台形土器に近い特徴をもつ。Ｂ群は、口縁部の穿孔・器受部端部の突出が形式化し、脚部の特徴にも小型器台の影響が認められるもので、結合器台形土器の部類と考えられる。Ｃ群は、口縁部の穿孔を失い、器受部端部の作りも水平化する。新しい一群は坏部下端に鍔状

突帯をもつ高坏と考えるべき土器である。D群は、A～C群のいずれにも見られない特徴をもつものを一括したが、概ね有孔高坏形土器と考えてよいものが多い。

第3に、この4群の土器はA→B→Cという変化の方向性をたどっており、D群はA群のやや新しい段階以降の展開期に並行して出現・展開している。結果的には「特殊な器台」の出現期は弥生時代終末期に遡る可能性をもつものの、埼玉県出土例は古墳時代初頭の五領期（古）段階を遡るものはなく、C群の最新段階は和泉期前半まで下るのである。

「特殊な器台」に関する各氏の見解を見るに、必ずしも北陸系土器のみの系譜としては理解されていないが、私見では、この種の土器は明らかに別系統と考えられる少数例を除けば、ほとんどを北陸系土器の系譜として考えるべきであることを積極的に評価しておきたい。

末筆となったが、上尾市雲雀出土土器の資料紹介のために土器を貸与していただいた玉口時雄先生、同じく土器の実測図の公表を快諾してくださった上、種々のご教示を賜った資料所有者の土肥孝氏、土器の実測や文献探索に多大なるご協力をいただいた中村倉司・木戸春夫・大谷徹・桜井元子の各氏のご高配がなければ小稿が形になることはなかった。ここに記して深く感謝いたします。

参考文献

青木義脩・小倉　均他　1980『別所遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第12集　浦和市遺跡調査会
植木　弘・植木智子　1988『行司免遺跡　本文編・遺物図版編』嵐山町遺跡調査会報告4　嵐山町遺跡調査会
書上元博　1994『稲荷台遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第　139集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
書上元博・柿沼幹夫・駒宮史朗・坂本和俊・関　義則・利根川章彦
　　1986「神川村前組羽根倉遺跡の研究」『埼玉県立博物館紀要―12』埼玉県立博物館
金井塚良一　1973『大谷遺跡』滑川村教育委員会
熊野正也　1974「特殊な器台形土器について(1)」『史館』第3号　史館同人
熊野正也　1977「特殊な器台形土器について(2)」『史館』第8号　史館同人
熊野正也　1980「特殊な器台形土器について(3)」『史館』第12号　史館同人
恋河内昭彦他　1997『城の内・日延・東田・浅見境北遺跡』児玉町文化財調査報告書第23集　児玉町教育委員会
小出輝雄　1983『針ヶ谷遺跡群―南通遺跡第3地点の調査―』富士見市遺跡調査会調査報告第21集　富士見市教育委員会
駒宮史朗他　1976『本郷東・愛宕』埼玉県遺跡発掘調査報告書第7集　埼玉県教育委員会
駒宮史朗他　1979『雷電下・飯玉東』埼玉県遺跡発掘調査報告書第22集　埼玉県教育委員会
塩野　博他　1981「埼玉県」『シンポジウム　関東における古墳出現期の諸問題《資料》』日本考古学協会
塩野　博・増田逸朗　1970『西台遺跡の発掘調査』埼玉県遺跡調査会報告第5集　埼玉県遺跡調査会
菅谷浩之他　1978『日の森遺跡』美里村教育委員会
杉崎茂樹他　1993『中耕遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第　125集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
鈴木直人　1994「特殊な土器の再検討（前編）」『史館』第25号　史館同人
玉口時雄　1973「古式土師器小考―福島県いわき市平原高野遺跡調査報告―」『東洋大学文学部紀要』第25号　東洋大学文学部
利根川章彦　1999『西富田・四方田条里遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第　224集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
富田和夫他　1994『稲荷前遺跡（B・C区）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第　145集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

長滝歳康　1991『白石古墳群・羽黒山古墳群』 美里町遺跡発掘調査報告書第７集　美里町教育委員会
西口正純他　1986『鍛冶谷・新田口遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
坂野和信　1987『下道添遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第67集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
増田逸朗他　1980『甘粕山』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第30集　埼玉県教育委員会
増田逸朗・高山清司他　1971『諏訪山貝塚・諏訪山遺跡・桜山貝塚・南遺跡発掘調査報告』 埼玉県遺跡調査会報告第８集　埼玉県遺跡調査会
増田逸朗・立石盛詞他　1982『後張　本文編Ⅰ・図版編Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
村田健二　1990『広面遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第89集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
村田健二他　1982『篭田・鶴田』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第20集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
森田安彦他　1998『千代遺跡群　弥生・古墳時代編』 埼玉県江南町千代遺跡群発掘調査報告書２　江南町教育委員会・江南町千代遺跡群発掘調査会
諸墨知義他　1984『鎌倉公園遺跡』 大宮市遺跡調査会報告第９集　大宮市遺跡調査会
諸墨知義他　1985『原遺跡』 大宮市遺跡調査会報告第12集　大宮市遺跡調査会
吉川國男・下村克彦他　1990『北本市史　第３巻上　自然・原始資料編』 北本市教育委員会
吉田　稔他　1991『小敷田遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
若狭　徹・田口一郎他　1998『人が動く・土器も動く―古墳が成立する頃の土器の交流』 第２回特別展図録　かみつけの里博物館

第２図～第５図の土器出土遺跡・遺構一覧

第２図　1　坂戸市中耕遺跡第32号周溝墓　2　大宮市原遺跡（水判土原分）第３号住居跡　3　川越市霞ヶ関遺跡２－G4－１　4　桶川市西台遺跡第３号住居跡　5　坂戸市中耕遺跡第42号周溝墓　6　上尾市稲荷台遺跡Ｂ区第55号住居跡　7　坂戸市稲荷前遺跡Ｃ区第１号周溝墓　8　坂戸市中耕遺跡第21号周溝墓　9　東松山市下道添遺跡第13号周溝墓　10　東松山市上野本表採一括遺物

第３図　11　児玉郡美里町日の森遺跡第１号溝跡　12　行田市小敷田遺跡５区河川跡　13　児玉郡児玉町浅見境北遺跡第20号住居跡　14　岩槻市諏訪山遺跡第７号住居跡（以上、Ａ群）　15　坂戸市中耕遺跡第42号周溝墓　16　坂戸市広面遺跡第18号周溝墓　17　北本市石戸城跡第１号住居跡　18　上尾市稲荷台遺跡Ａ区第28号住居跡　19　戸田市鍛冶谷・新田口遺跡Ａ区２号包含層（以上、Ｂ群）

第４図　20　児玉郡神川町前組羽根倉遺跡第５号周溝墓　21　比企郡滑川町大谷遺跡第５号住居跡　22　富士見市南通遺跡第３地点第31号住居跡　23　東松山市下道添遺跡第11号住居跡　24　児玉郡美里町羽黒山古墳群第９号住居跡　25　大里郡江南町姥ヶ沢遺跡第19号住居跡　26　戸田市鍛冶谷・新田口遺跡Ｂ区第79号井戸　27　坂戸市中耕遺跡表採　28　岩槻市諏訪山遺跡第５号住居跡　29　同第34号住居跡　30　同第７号住居跡　31　本庄市後張遺跡第 152号住居跡　32　児玉郡美里町如来堂Ｃ遺跡第２号住居跡　33　大里郡江南町富士山遺跡第16号住居跡　34・35　児玉郡上里町愛宕遺跡第３号住居跡　36・37　同第１号住居跡　38　同第７号住居跡　39　同第10号住居跡　40　同表採（以上、Ｃ群）　41　比企郡嵐山町行司免遺跡第 281号住居跡（A′群）

第５図　42　本庄市西富田・四方田条里遺跡第２号住居跡　43　大宮市鎌倉公園遺跡第32号住居跡　44　行田市小敷田遺跡５区河川跡　45　戸田市鍛冶谷・新田口遺跡第27号周溝墓　46　児玉郡児玉町雷電下遺跡表採　47　行田市小敷田遺跡５区河川跡　48　浦和市別所遺跡第６号住居跡　49　戸田市鍛冶谷・新田口遺跡Ａ区２号包含層　50　坂戸市中耕遺跡第35号住居跡（以上、Ｄ群）

研究紀要 第15号

1 9 9 9

平成11年3月25日　印刷

平成11年3月31日　発行

発　行　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108　大里郡大里村船木台4丁目4番地1

☎0493—39—3955

印　刷　朝日印刷工業株式会社